

挑戦者を育てよう

中国支部長 藤岡清人



本学会のような工学系学会は、技術者（研究者を含む広義の技術者、以下同じ）にとって、研究発表を行うだけでなく、会誌や論文誌を通して、新しい研究動向や技術動向を知る上で重要な役割を果たしている。技術者の卵たちの工学系学会への定着率向上が望まれるが、学生は研究発表を行うときには学生員となるが、卒業後、職場や仕事の関係もあつてか、脱会していくものも多い。これには、本学会も含め、これといって打つ手がないのが実状であるが、理科離れの問題と同様、工夫が求められる。

一方、スポーツの世界に目を転じると、数々の素晴らしいプレーが私たちに魅了する。メジャーリーグでは、イチロー選手や松井選手などの活躍が、日本中に感動を与えている。世界で挑戦を続ける彼らが、日本人でもここまでできるということの世界に知らしめている。そしてそれは、明日の野球界を担う青少年たちに夢や希望を与えている。

では、技術の世界ではどうだろう。高校野球が多くのプロ野球選手を生み出したように、工学部が数々の優秀な技術者を輩出してきた---のも、今は昔話か。NHKのプロジェクトXには多くの技術者が取り上げられ、成功の陰の知られざるドラマには無名の「挑戦者たち」の姿があることが心を打った。現在の電気電子離れは、そんなものづくり大国日本の土台を揺るがしている。果たして、技術者とは、そんなに魅力のないものなのか。いや、そんなことはない。私たちの身の回りにも、名もない技術者が作り出したたくさんの感動を与えるものがあるのだから。メジャーリーガーほどの派手さはないが、無名な日本人の挑戦が確かに私たちの生活に欠かせないものとして、そこかしこで息づいている。例えば、「痛くない注射針」など独自の製品を開発し世界から注目を集める、岡野工業株式会社のプレス加工技術。また地方の一企業である日亜化学工業の中村修二氏の開発した青色発光ダイオード。後者は特許訴訟でマスコミを騒がしたので御存知の方も多いかもかもしれないが、一番の東京地裁では200億円の支払いを命じられたものの、上訴審では8億円の和解で決着した。これを機に、権利主張する技術者が出てきたのは当然の流れかもしれない。これらの例は地味な研究からスタートしているが、結果として世界から注目される派手なものになっているだけ。共通して言えるのは、研究に取り組む際の心掛け、だれもやらないなら自分が、世界でまだだれも成し遂げていない開発に自分がという挑戦者の気概にほかならない。

それでは、これからも優秀な技術者を輩出していくためには、何が必要であろうか。学会として何ができるのか、何をなすべきか。各支部の活動など、人材、企業など限られたリソースの中では限界がある。地域の企業や大学を含め、そのような気概を持った人材を育成するのは一朝一夕ではできない。そのような気持ちを持てる、感動を与えられる場を提供することもその一つであると考えられる。それには、学生に一番近い存在である大学教師の役割が重要である。企業は共に、将来の日本を支える学生諸君が学会を通じて感動を得られるような協力をすることが必要である。ロボットコンテストでの学生の真剣なまなざしには心を打たれる。このようなコンテストでもよい、地域で良いアイデアがあれば、共に共有し、発展させていくことが、技術者離れにブレーキをかけることができるのではないだろうか。そのような活動の中で、技術者として困難に立ち向かう挑戦者としての資質を養うことができるのではないだろうか。幸いなことに、中国支部では企業の協力を得て、学生会主催のイベント（携帯コンテンツにかかわるアイデア・作品募集）を実施し、10月の電気・情報関連学会中国支部連合大会にて発表・表彰を予定している。どんな挑戦者たちが現れるか楽しみにしている。